



新年度が始まり、早くも一ヶ月が過ぎました。新緑の季節は、何とも清々しいものです。私も愛犬も寒いのが苦手なので、ようやく冬ごもりが終わったような気分です。子どもたちは新しい環境の中で、それぞれのペースで一步ずつ前に進んでいます。ゴールデンウィーク明けは、気持ちが揺れやすい時期でもあります。「行きたくない」と言ったり、涙が見られたりするところもあるかもしれません。しかしそれは環境に慣れ始め、自分の気持ちを表せるようになってきた証でもあります。子どもたちは揺れながらも、確実に成長していますよ。

さて、福岡市にある私立幼稚園の多くは『福岡市私立幼稚園連盟』に所属しています。連盟では、様々な年齢層や役職に応じた研修が行われており、職員が常に自己研鑽に努められる環境が整っています。先日、慶應義塾大学で教育経済学を専門とされている中室牧子教授の研修を受けてまいりました。中室先生の研修は今回で2回目になりますが、毎回新しい発見や気づきがあり、大変学びの多い時間となっています。本園の『教育方針説明会』でお伝えしている「早期教育による認知能力は9歳頃に逆転する」「大切なのは非認知能力である」という考えも、この研修から学んだものの一つです。今回は、その研修の中から印象に残った内容をご紹介します。

ある研究では、テストのあとに「頭がいいね」とほめられた子どもと「よく頑張ったね」と努力を認められた子どもを比較したところ、その後、難しい課題に挑戦したのは「頑張り」を認められた子どもたちであったと報告されています（キャロル・ドウエックの研究より）。またアメリカでは、質の高い幼児教育を受けた子どもたちを長期間追跡した研究があります。ここでいう質の高い教育とは早期教育のことではなく、①挨拶や食事のマナーなど基本的な生活習慣、②自然との関わり、③遊びを通して文字や数に親しむこと等を指します。その結果、将来の収入や生活の安定、さらには犯罪に関わるリスクの低下など、望ましい傾向が見られたことが報告されています。これらが示しているのは「その時にできるかどうか」だけではなく、日々どのように関わっているかが、

その後の成長に大きく影響するということです。私たちはつい「できた・できない」という結果に目を向けがちです。しかし本当に大切なのはうまくいった結果だけでなく、うまくいかなかった過程やその中での頑張りに目を向けることです。そしてもう一つ、大切にしたいことがあります。それは、「寄り添うこと」と「甘やかすこと」は違うということです。子どもの気持ちを受け止めることはとても大切です。しかし、大人がすべてを先回りして整えてしまうことが、必ずしも子どものためになるとは限りません。時には立ち止まり、考え、乗り越えようとする経験が、子どもの力を育てていきます。すぐに手を差し伸べるのではなく、少し待つこと、見守ること。その積み重ねが「自分でできた」という自信へとつながっていきます。園では、一人ひとりの小さな変化や挑戦する姿を大切にしながら関わっています。泣いていた子が少し遊べるようになったこと、先生の話に少し耳を傾けようとする姿、お友だちと関わろうとする様子——その一つひとつが確かな成長です。ご家庭でもぜひ、「結果」だけでなく「過程」に目を向けていただければと思います。そして、子ども自身が力を発揮できるよう、「少し待つ時間」を大切にしていただけましたら幸いです。子どもたちの成長を、園とご家庭とで支え合いながら見守っていきましょう。



ぽかぽか日和



当園の元職員 H 先生は、3年ほど前から小学校で理科専科教員として勤務しています。この4月、H先生から近隣の小学校に着任したとの知らせがありました。同校に入学した卒園児の S 君は年少の頃、H先生が担任だったので、妹のお迎えと一緒に来た時に思わず呼び止めて声をかけました。ところが「学校でH先生に会った？」と尋ねたところ、思いがけない答えが返ってきました。「うん…。会ったけど、A先生だった…。」幼稚園では名前で呼ぶことが多いですが、小学校では苗字で呼ばれることが一般的です。きっと S 君も、呼ばれ方の違いに少し戸惑ったのでしょう。長く親しんできた呼ばれ方が変わることもまた成長の一つなのだと感じさせられました。 園長： 讃井 理香

